

# 『ユダヤ戦記』 II 151b—153 の文学的性格 について

土 岐 健 治

筆者は『言語文化』第17号に「エッセネ派に関する一考察」を発表した。これに対し幾人かの方々から加えられた好意ある批評と示唆を考慮しつつ、旧稿に増補を加えた内容を、1981年5月の日本聖書学研究所例会に於て口頭発表した。さらにこれに推敲を加えたものが、Der literarische Charakter des Bell. Jud. II 151b—153 と題して *Annual of the Japanese Biblical Institute*, Vol. VII (1981), 53—69 に掲載された。以上の経緯を踏まえて、以下に、独文新稿における旧稿への増補の内容を『言語文化』の読者に報告したいと思う。

\* \*

旧稿の論点を補強すべく、新稿では旧稿の第 II 章に続けて、新しく以下の考察が加えられた。

『ユダヤ戦記』II 151b—153 の歴史資料的価値を論ずるに当って、我々はここでこの箇所文学的性格に眼をとめねばならない。というのは、この部分は古代ユダヤ教文学の中に認められる「殉教物語」とも言うべき文学様式にのっとっていると考えられるからである。

筆者の調査によれば、旧約聖書外典典典からタルムッドに至るユダヤ教文学の中には、「殉教物語」と称すべき文学様式が認められる。筆者はその構成要素 (Topoi=Bestandteile der Literaturform) として、以下の諸点を挙げ得ると考える (一層広汎な文献資料

の渉獵によって、将来幾つかの是正が加えられる可能性を、この場合特にお断りしておきたい。ラビ文献の規模については贅言を要しないであろう)。(1) 殉教者(たち)の死あるいは身の危険をも恐れぬ覚悟、(2) 律法あるいは神との契約への配慮と忠誠、(2') 殉教者を苦しめる者(たち)による背教の勧告(省略されることもある)、(3) しばしば極めて残酷な拷問の描写、(3') 拷問を加える者たちの殉教者の態度に対する驚嘆(省略されることもある)、(4) 殉教者の平然とした態度、(5) 永遠の生命(あるいは、来生、復活、靈魂不滅)の信仰の表白(殉教者による場合が多いが、報告者による場合もある)。以上の構成要素(以下 T (=Topos) と略記)の存在を、以下のユダヤ教殉教物語文学によって確認することにしたい。

i) 「第二マカベア書」6, 18—31。(T 1) 優れた律法学者、老エレアザルは、豚肉を食べ「けがれと恥辱」にまみれた余生を送るよりは、「良い聞こえを得て死ぬ」ことを選ぶ。(T 2) 彼は、律法の禁ずる食物は決して食べようとしない。(T 2') 拷問係の者は、律法の許す肉をエレアザルが自分で持ってきて、豚肉を食べるふりをするよう勧めるが、これも拒否する。(T 3) 彼は激しい鞭打ちの刑によって死を迎える(6, 30 f.)。(T 4) 彼が自らすすんで拷問台へと向かったことが明記される(6, 19, 28; 23をも参照)。(T 5)

死を前にして苦しみの中で、エレアザルは自分が「死から解放され得る」ことを宣言する(6, 30)。

ii) 「第二マカベア書」7, 1—42。(T 1, 2) 七人兄弟とその母親は、父祖伝来の律法を犯すよりはむしろ死を決意する。(T 2') 拷問係が次男に豚肉を食べよう勧め(7, 7), 王アンティオコスは末子に、父祖伝来の習慣を離れれば、幸わせに国事をも委ねようと約束する(7, 24f.)。(T 3) 残酷な拷問の様子が細かく具体的に描かれる(7, 1—5, 7f. 10; 13, 15等)。(T 3') 王とその供の者たちは若者の精神に驚嘆する(7, 12; 7, 20をも参照)。(T 4) 殉教者たちの平静と落ちつきがくり返し報告される。(T 5) 肉体の甦りの信仰がくり返し言い表わされる(7, 9, 11, 14, 23, 29, 35)。

iii) 「第四マカベア書」4, 26—7, 23。(T 1, 2) エレアザルは父祖伝来の律法を犯すよりは、死を決意する(6, 7, 27参照)。(T 2') 拷問係は、温めた(きよらかな?)食物を、豚肉を食べるふりをして食べるよう勧める(6, 14f.)。(T 3) 極めて残酷な拷問の描写(6, 1—11, 24—26; 5, 29f.をも参照)。(T 3') エレアザルの豪胆さ、忍耐強さが驚嘆される(6, 11, 13)。(T 4) 彼の平静と忍耐強さが強調される(特に6, 5—10, 24ff.)。(T 5) エレアザルは、彼の魂が神と父祖たちによって(天へ?)受け容れられることを信じている(5, 37; 6, 29; 7, 19)。

iv) 「第四マカベア書」8, 1—18, 23。(T 1, 2) 七人兄弟とその母親は、父祖伝来の律法を犯すよりは、死を覚悟する。(T 2') 王と拷問係の者たちは、わが身を救うよう、くり返し忠告する。(T 3) 様々な拷問具を用いた極めて残酷な拷問の様子が描写される。(T 3') 王は殉教者たちの美しさに驚き、人は彼らの精神力忍耐に驚嘆する(9, 26;

17, 17; 18, 3)。王は兵士たちに「彼らの忍耐力を模範とするよう」告示する(17, 23)。(T 4) 殉教者は全員、平然と死に赴く。(T 5) 天における神と父祖たちの許での彼らの至福なる生命と、靈魂の不滅とが、くり返し強調される(9, 8; 14, 5f.; 15, 27; 16, 13, 25; 17, 5, 12; 18, 23)。

次に挙げる『バビロニア・タルムッド』には未だ邦訳が無いので、上記四例よりは多少詳しく内容を紹介する。

v) 『バビロニア・タルムッド』「ベラコス」61b。(T 1, 2) かつて邪悪な政府(=ローマ帝国)が、律法(トーラー)を学んだり実行したりすることをユダヤ民族に禁止した。しかるにラビ・アキバは公然と民を集めて、共に律法を学んでいた(或いは、教えていた)ため、逮捕され投獄された。彼と同じ獄舎に、些事で投獄されたバツボス・ベン・イエフダが「ラビ・アキバよ、あなたは律法にかかわっていたために捕えられて、幸せです。このバツボスはささいなことで捕えられて、みじめです」と叫ぶ。アキバはユダヤ教でシエマの朗唱が定められていた時刻にシエマ(ユダヤ教の信仰告白の定式。申命記6, 4—9; 11, 13—21; 民数記15, 37—41から成る)を朗唱しつつ処刑される。(T 3) 兵士たちはアキバの肉を鉄のかぎで骨から引きちぎる。(T 4) アキバは、死の苦痛の中で、シエマを朗唱しつつ、今はじめて「精神をつくして」(申命記6, 4)即ち「彼(神)が汝の生命を奪う時も(神を愛せよ)」とのことばを実行し成就することができた、と語り、「我々の神、主は唯一の主である」(申命記6, 4)の「唯一の」をゆっくりと唱えつつ、殉教の死を遂げる。(T 5) 天から声があり(קול בת = bath qol)「ラビ・アキバよ、汝は幸いな。汝は来るべき世において生命を受くることが約束されている」と語る。(T 3' として、

シエマを唱えるラビに、弟子たちが「先生、こんな所（時）でも？」と語ることを挙げ得るかもしれない。

なおラビ・アキバは、いわゆる第二次ユダヤ戦争（紀元後 132—5 年）の指導者バル・コクバ（＝バル（ベン）・コシバ）を「メシア」とたたえたことが知られており、アキバの逮捕処刑がバル・コクバの対ローマ反乱を支持したことと関係があった可能性が高い。タルムッドの伝承がこの点に全く言及しないのは、ラビの死があくまでも宗教的な殉死であって反乱とは一切関係なかったことを印象づけようとする意図によるものであろう。なおラビ・アキバの殉教に関する並行記事を伝える『パレスチナ・タルムッド』「ペラコス」9, 14b は、逮捕処刑の理由も、天からの声も記していない。（Strack-Billerbeck, I 224 によれば『パレスチナ・タルムッド』「ソタ」5, 20c も同様とのこと）。このことは、筆者の考える「殉教物語」の分布について、興味深い示唆を与える。（初期キリスト教の殉教者行伝文学も、必ずしも上記のトポイを備えていないことも付記しておく）。

vi) 『パピロニア・タルムッド』「アボダ・ザラ」17b—18a. (T1, 2) ハドリアヌス帝は、律法（トーラー）に関わるものは死刑に処す、との布告を発した。しかるにラビ・ハニナ（又はハナニヤ）・ベン・テラディオンは、律法に関わり、公然と（律法を学ぶ）集会を開き、トーラーの巻物をふところに携えていた。(T3) そこで彼は捕えられ、トーラーの巻物の中にくるみ込まれた。人々はさらにそれを木の枝でくるんで、それを火の上に置いた。そしてハニナの苦痛を長びかせるために、彼がすぐ死なないように水を含ませた布を彼の胸に当てた。(T4) ハニナは、トーラーの巻物と一緒に燃やされることを喜ぶ。(T5) 天から声があり、来るべき世における

生命をハニナに約束する。(T3' として、拷問係の者がラビに「炎を強め、胸のぬれ布巾を取り除いたら、(ラビを早く死なせて苦痛の時を短かくした報償として)、自分も来るべき世に入ることができるか」と尋ね、肯定の答を得ると、その通りにして、自分も火の中に飛び込む、という部分を加え得るかもしれない)。なおラビ・ハニナの死は紀元後 135 年頃のこととされる (Lohse, 73)。

vii) 『ユダヤ戦記』I 648—655＝『ユダヤ古代誌』XVII 148—167. (T1, 2) ユダとマッティヤという二人の「賢者」(σοφιστής＝σοφία) が、ヘロデス大王が造らせて神殿の大門の上に置いた黄金の鷲像を打ち壊すよう人人を扇動し、「たとえ何か危険な事態になったとしても、父祖伝来の律法のために死ぬのはよいこと」(I 650) であると語る。I 652 でも、その行為が律法によることが強調される。(T3) ヘロデス大王は二人の賢者と、捕えられたその仲間の一部を、火あぶりの刑に処する。(T4, 5) 賢者たちは死後「不滅なる靈魂と至福なる永遠の感覚」(I 650) が与えられることを信じ、処刑を前にして「死後、より大いなる幸いを味わうから」「喜んでいる」(I 653)。

viii) 『ユダヤ戦記』VII 341—406. これは厳密には殉教物語とは言えないが、それと同様の構成要素を備えており、我々の研究にとって参考になると思われる。紀元後 70 年にエルサレムがローマ軍の手により陥落した後、エリエザルの率いるシカリ派の一派がマサダの要塞にたてこもってローマ軍に抵抗を続けた。しかし 73 年になって、ついにマサダも陥落し、中にいたシカリ派は自害して果てた。ここで取りあげるのはマサダ陥落直前の要塞内部のユダヤ人に関する叙述である。(T1, 5) 陥落直前にシカリ派の首領エリエザルのなした演説（第二の演説。VII 341—

388) の中心主題は「靈魂不滅」である。彼は部下たちに、靈魂不滅を信じて、勇気をもって自殺するよう勧める。380 参照。(T2) 彼は律法の命令と神の意志に言及する(387)。(T3, 4) 集団自殺の痛ましい光景が描かれる(389-398)。全員が勇敢に行動する。これは敵による拷問処刑ではないが、「まるで敵の手に助けられたかのごとくに決断を実行した」(392)。エレアザルの演説の中では、ローマ人によるユダヤ人に対する拷問も言及される(373)。(T3') 要塞になだれ込んだローマ兵は、事態を理解して驚き、ユダヤ人の「雄々しい決断と、これほど多くの人々が死を恐れぬ心を実際の行動で示したことに驚嘆した」(406)。

ix) 『ユダヤ戦記』VII 417-9。マサダ陥落後、さらにシカリ派の別の一団がエジプトへ逃れたが、間もなく捕えられた(その数六百とヨセフスは伝えている)。以下は彼らの最後を伝える VII 417-9 の訳である。「彼ら(捕えられたシカリ派の者たち)の堅忍不拔の精神(καρτερία)——自暴自棄的な無鉄砲(ἀπόνοια)と呼ぶにせよあるいは意志力の強さ(γνώμης ἰσχύς)と呼ぶにせよ——に驚嘆しない者はなかった。ただただ(神でなくて)カエサルこそが彼らの主人(支配者。δεσπότης)であると言ひ表わさせるためにのみ、彼らに対してあらゆる拷問、あらゆる肉体への暴虐が考案されたにもかかわらず、彼らの中の誰一人としてこれに屈することなく、口を開こうとしなかった。このような圧迫をもものともせず、彼らは全員自分たちの決断を守り抜いた、拷問のみならず火をも、感覚の無い肉体と歓喜の内にある魂で受けとめているかのごとくに。中でもとりわけ、子供たちの年齢が見る者たちの心に深い感銘を与えた。子供たちもまた誰一人として、カエサルを主人(支配者)と言ひ表わさなかったので

ある。彼らの不屈の精神力はこれほどまでに肉体の弱さを克服したのであった」。以上の記述の中に我々は T 1, 2, 3, 3', 4, 5 を確認し得るであろう。

以上において、我々は、いくつかの明確な構成要素を持つ、ユダヤ教殉教物語という文学様式存在を確認した。次に、『ユダヤ戦記』II 151b-153 の中に、これらの構成要素が認められるか否かの検討に移らねばならない。

(T1)「彼らは危険を軽んじ、精神力によって苦難にうちかち、死も栄光を伴ったものならば、不死よりも優れたものとみなしている」。

(T2)「彼らは……立法者(モーセ)を冒瀆し、あるいは食べる習慣でないものを食べるようにと」拷問によって苦しめられたが、「いずれの要求にも屈」しなかった。

(T3)「彼らは……拷問台の上に縛りつけられ、ねじ曲げられ、焼かれ、引き裂かれ、あらゆる拷問具の中を通らされ」た。

(T4)「彼らは、……いずれの要求にも屈することなく、拷問を加えている者たちにへつらったり、あるいは涙を流すこともなかった。むしろ、苦難の中にもほほ笑みを浮かべ、拷問係の者たちをあざ笑」った。

(T5)「彼らは……再び(生命を)取り戻すのだと言った態度で、喜んで生命を投げ捨てたのである」。

以上により、ヨセフスがここでエッセネ派を、殉教物語という文学様式にのっとって描いていることは明瞭にされたことと思う。

\* \*

ところで上に挙げた vii, viii, ix の三例において、ヨセフスがユダヤ人の英雄的な行動を理想化しつつ描いていることが注目され

る。そこで、ヨセフスが殉教をどのように考えていたのか、ということが問われねばならない。彼は『アピオンへの反論』の以下の四箇所において、ユダヤ人の律法遵守との関連で、ユダヤ人は拷問の苦しみや死の恐怖をも恐れることなく、生命をかけて律法を守り抜く、と誇らしげに確言している。

I 42 f. 「すべてのユダヤ人にとって、それ（聖書）を神の意志と信じ、それに固着し、必要とあらばそのために喜んで死ぬことは、生得的なことなのである。実際すでにこれまでも多くの機会に（ユダヤ人）捕虜の多くの者たちが、律法及びそれと一緒にいる諸文書に背いて一言たりとも語るまいとして、劇場において、拷問とあらゆる種類の（刑）死に耐える姿が見られているのである。」

I 190 f. 「ヘカタイオスはさらに又、我々の律法に対する態度、すなわちこれら（律法）に違犯しないためにはどのようなめに会うことも辞さず、それを美しいこととみなしていること、を明らかにしている。彼は言う。『こういうわけで彼ら（ユダヤ人）は、彼らの周囲の人々（民族）や、（遠くから）彼らのところへやって来たすべての人々によって、ひどいことばをあびせられ、またペルシアの王たちや知事たちによって度々屈辱的な取り扱いを受けたが、その信念を曲げることなく、これら（律法）のためには、拷問にも、また何にも増して最も恐ろしい（刑）死にも、裸で立ち向かい、父祖伝来のものを拒まなかったのである』。

II 218 f. 「（ユダヤ人は）一人一人が自分自身に証しする良心を持ち、立法者（モーセ）の預言と神の与え給う固い信仰の力により、次のように信じている。即ち、律法を守り通し、もしもそのために死なねばならない場合には自ら進んで死ぬ者たちに、神は、再生すること（*γενέσθαι πάλιν*）と、転換

（*περὲρροπή*）に際してよりよい生を受け取ることとを許し給うこと。既にこれまでにわが民族の多くの者たちが、多くの機会に、律法に背く言葉を決して口にすまいとして、むしろどんな苦しみにも立派に耐える方を選んだことが、事実を通して万人の眼に明らかでなかったならば、私はこれらのことを書き記すのを躊躇したことであろう。」

II 232, 234. 「(232) 一体、我々（ユダヤ人）について、律法に背いたり死を恐れたりした者を、これ程の多人数は言うまでもなく（訳注：直前でラケダイモン人多数による集団投降が言及されている）、ほんの二、三人でも知っている者があるだろうか——それも、戦闘中の者にふりかかる最も耐えやすい死ではなく、肉体の苦痛を伴う、何にも増して耐え難くつらいものと思われる死のことを言っているのだが。…… (234) 我々（ユダヤ人）が、他のすべての人々（民族）にまさって、律法のために勇敢に死に対するとしても、驚くべきではない。……」

以上四箇所とも、すべてのユダヤ人にあてはまる事柄として記されており、エッセネ派や熱心党・シカリ派と言った特定のグループの名は挙げられていない。ヨセフスは殉教を理想化し美化しており、殉教こそユダヤ人の優秀さを示す最高のしるしであると考えていたことがうかがわれる。さらに、「すべての」「多くの機会に……多くの者たちが」「一人一人が（*ἕκαστος*）」「度々」といった表現がくり返し用いられていることが注目される。「すべてのユダヤ人が聖書のために喜んで死ぬ」であろうか。あらゆる拷問の苦痛に多くのユダヤ人が耐えて殉教する姿が、くり返し劇場等で見られたであろうか。「律法に背いたり死を恐れたりした」ユダヤ人を「二、三人」知っている者がいないであろうか。われわ

れはヨセフスの著作のみからでも、簡単に反証を挙げることができるであろう。『アピオンへの反論』の中でも要とも言うべき位置を占めているこれら四箇所において、ヨセフスは、殉教というテーマを利用してユダヤ人の優秀性を強調したのであるが、そこには一般的な表現がくり返されるのみで、具体的な例は一つも挙げられていないのである。つまりヨセフスは、殉教というテーマと、それを扱った殉教物語という文学様式を、ユダヤ人の優秀さを読者に訴えるための強力な武器と考えたのである。『ユダヤ戦記』の中にも、同様の趣旨で、しばしば前後の文脈や論理的一貫性を無視してまでも、殉教物語乃至殉教物語的なものが多用されていることは、既に他の機会に指摘した（拙論「歴史家ヨセフスの誕生」『聖書と教会』1981年10月号。さらに、たとえば、『ユダヤ古代誌』XVIII 4-10でガリラヤのユダの一派の活躍をユダヤ民族が蒙ったその後の災難の源のように記しながら、同 23 f. では神のため、自由のために激しい苦痛を喜んで受け入れる彼らの態度を記す時、ヨセフスはそれとなく同胞の勇敢さを自慢しているように思われる）。『ユダヤ戦記』II 151 b-153 もその中の一つとみなすべきことは明らかであり、ヨセフスはここでエッセネ派を賞讃し讃美することを目的として、殉教物語という文学様式を利用した、というのが筆者の結論である。

\*            \*

その際にヨセフスが、マカベア時代の殉教物語を下敷きにした、という点は、旧稿の第III章で論じたとおりである。その中で筆者は、ヨセフスはおそらく「ヤソンの歴史書」を利用した可能性が高いことを指摘した。この点の綿密な検討がなお将来の課題であることは、旧稿に記したとおりであるが、ここでは予備的な考察として、以下の点を指摘して

おくことにする。

(1) 『ユダヤ戦記』の主として I 31-40 において、我々は、「第二マカベア書」にあって「第一マカベア書」にはない以下の諸点を見出す。(i) ユダヤ人内部の争いについての言及 (I 31, 「第二マカベア書」5, 5 ff.)。 (ii) アンティオコス四世はユダヤ人の導きによりユダヤへ侵入する (I 32, 「第二マカベア書」5, 15)。 (iii) I 32 の πάντες は「第二マカベア書」6, 3 の τοῖς ὄλοις に対応し、「第一マカベア書」1, 52 と対立する。(iv) アンティオコス四世は、エルサレム乃至その神殿が清められた頃に死ぬ (I 40, 「第二マカベア書」9)。 (v) I 19. 31 の Ἀντίοχος ὁ κληθεὶς Ἐπιφανής は「第二マカベア書」4, 7 の Ἀντίοχου προσαγορευθέντος Ἐπιφανοῦς に類似している。「第一マカベア書」1, 10 の Ἀντίοχος Ἐπιφανής と比較せよ。ヨセフスは καλέω の受動分詞を、地名には頻用するが、人名にはほとんど用いていない。(vi) II 358 の「おごり高ぶったクセルクセスが陸を舟で海を徒歩で渡り」は「第二マカベア書」5, 21 の「アンティオコスは……陸を舟で海を徒歩で進めるようにしようと思いがあがった考えを抱き……」を連想させる。

(2) 他方『ユダヤ戦記』I 31-40 は、「第一マカベア書」にも「第二マカベア書」にも見出されないいくつかの言及を含んでいる。(i) 「トビア家の者たち」、(ii) 「コイレ・シリア」(Aldrich の推読。写本は「全シリア」)。(iii) 「ブトレマイオスに味方していた多数の者たち」。

以上の (1) と (2) より、ヨセフスは「第二マカベア書」と「第四マカベア書」の資料となった「ヤソンの歴史書」を直接利用した可能性が高いように思われる。Goldstein, 60 f. は、ヨセフスは「ヤソンの歴史書」をかつて読んだ記憶にたよって利用した、と考

えているが、残念ながらその点についての詳論は未刊の『第二マカベア書注解』に譲っている。

\* \* \*

以上により、我々は『ユダヤ戦記』II 151b—153 を、エッセネ派が第一次ユダヤ・ローマ戦争（66-73年）に参加したことを伝える資料として用い得ないことを、改めて確認した。筆者は、彼らが集団として参戦した可能性は薄いと考えるが、参戦した可能性を全く否定し得ぬことも当然である。いずれにせよ、ヨセフスの報告するような仕方では彼らが滅んだのではないことは、ほとんど確実であろう。我々はせいぜい、ヨセフスの記述の背後に、エッセネ派も他の多くのユダヤ人同様、ローマ軍に殺されたという事実があったのかもしれない、と推測し得るのみである。

このように問題の箇所の歴史資料としての評価について、我々は否定的な結論を再確認せざるを得なかったが、文学様式という視点を導入することによって、ヨセフスの文学的手法について新しい視野を開くことができた。（この点について荒井献東京大学教授の示唆を忝なくしたことを感謝をもって記すものである）。ヨセフスの歴史記述全体における殉教及び殉教物語の位置づけについては、稿を改めて論ずることにしたい。さしあたり、彼の歴史記述の動機・目的との関連で殉教物語に言及した上掲拙論をお読み頂ければ幸いである。

本稿作成のために参照利用した文献のうち、旧稿の注で挙げてないもののみを、以下に示す。

*Encyclopaedia Judaica*, Vols. 2, 7 (Jerusalem, 1972)

Epstein, I. (ed.): *The Babylonian Talmud: Seder Zera'im* (1948), *Seder*

*Nezikin* (1935) (London: The Soncino Press)

Epstein, I. (ed.): *Hebrew-English Edition of the Babylonian Talmud: Bera-koth* (London: The Soncino Press, 1960)

Goldschmidt, L.: *Der Babylonische Talmud*, Bd. 1 (Kongstein/Ts.: Jüdischer Verlag, 2. Aufl. 1964)

Goldstein, J. A.: *I Maccabees* (The Anchor Bible 41, 1976)

Horowitz, Ch.: *Der Jerusalemer Talmud in deutscher Übersetzung*, Bd. 1 (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1975)

Lohse, E.: *Märtyrer und Gottesknecht* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2. Aufl. 1963)

Pelletier, A.: *Flavius Josephus: Guerre des Juifs*, Tome II (édition Budé, 1980)

Reinach, Th. et Blum, L.: *Flavius Josephus: Contre Apion* (édition Budé, 1930)

Strack, H. L. und Billerbeck, P.: *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, Bd. 1 (München: C. H. Beck, 1926)

Thackeray, H. St. J.: *Josephus: The Life, Against Apion* (Loeb edition, 1926)